



宗教改革の導入を決議するジュネーブ市民  
(1536年5月21日の様子を描いた絵)

# カルヴァン政治思想の 形成と展開

自由の共同体から抵抗権へ

住田博子 著 (すみた・ひろこ氏は首都大学東京オーブン・ユニバーシティ講師)

1月25日発売

## 独裁的な神政治か、近代的自由の先蹤か

本書は、カルヴァンの共同体論をその聖礼典論を手がかりに探求するという斬新な視点を通して、カルヴァンの自由論とジュネーブの国家教会体制の実践を整合的に理解し、さらには抵抗権への展開を展望することを目指した若手研究者の労作。

政治思想史と神学の両者におけるカルヴァン観に新たな刺激を与えるであろう。

◆ A5判・290頁・本体3600円

関連書

キリスト教綱要 改訳版 カルヴァン著／渡辺信夫訳

3分冊(第1・2篇／第3篇／第4篇) 最も重要な古典が読みやすく。

各巻 本体4500円

宗教改革史 ベイントン著／出村彰訳

第一人者が書き下ろした通史の名著が新版として復活。

本体2800円

# 神と向き合って生きる

横田幸子著

◆ B6判・300頁・本体 1700円

## 魂を震わす 23 の説教

1月24日発行

聖書のメッセージを深く読み解き、「信ずる」「祈る」「愛する」「生きる」というテーマに沿いながら、現代人の魂の渴望に応える。

「祈りは自然にほとぼしりです。喜びや感謝はもとより、自分たちのおかれているところから、さまざまな問いを投げかけたり、虚無的な想いをつぶやいたりして、神からの応えである『み言葉』を聴き取ります。同時に『あなたはどこにいるのか』と神から質問されてたじろいだらします。神と人との関係性を表す『対話』が綴られているのが聖

書です。説教は、その対話を証言する『祈り』と言ってもいいのでしょうか。」

(あとがきより)



よこた・さちこ氏は1933年生まれ。日本聖書神学校卒業。日本基督教団美竹教会、大泉教会、塩尻アイオナ教会牧師を歴任、2016年引退。著書『イエスと呼びあつた女たち』、『かみさま おてがみ よんでね』(コイノニア社)ほか。

### ● 斬新な入門書

# 信仰の基礎としての神学

キリスト教神学への道案内

1月25日発行

松田央著

◆ 46判・190頁・本体 1700円

信徒や求道者にふさわしい神学教育のために

本書は、現代人の求道的関心と知的関心に応えるために著された。各教派で当然の真理と考えられていた神学や信条を再点検し、新たな視点からキリスト教を再構成しようと試みる。さらに本書は、信徒や求道者が日常生活において神の働きを容易に経験できる方法論を提示する。

まつだ・ひろし氏は1954年生まれ。慶應義塾大学法学部を経て、同志社大学大学院神学研究科で学ぶ。神戸女学院大学名誉教授。日本基督教団正教師・博士(神学)。主な著書:『キリスト論』(2000年)、『信じること、疑うこと』(2005年)、『キリスト教の基礎』(2007年)、『世の光キリスト』(2008年)、『キリストの道』(2011年)など。

栗林輝夫著／西原廉太・大宮有博編

## アメリカ現代神学の航海図

フエミニスト神学、ウーミニスト神学、アジア系アメリカ神学、ポストモダン神学、ポストトリベラル神学、修正神学、プロセス神学等々、複雑かつ活発な運動を絶やさないアメリカ現代神学の鮮やかな見取り図。〔栗林輝夫セレクション〕2。

◆A5判・予価5500円

八谷俊久著

## 歴史から世界へ

20世紀のプロテスタント神学におけるキリスト論の諸問題 バルト、ボンヘッフアー、ブルトマン、ティリツヒ、モルトマンらのキリスト論の思惟を克明に追跡し、点(逆説)から線(歴史)へ、そして面(世界)へと広がる必然性を考察する。

◆A5判・予価3500円

一色哲著

## 南島キリスト教史入門 (仮題)

琉球王国の最大版図とほぼ重なる「南島」のキリスト教の歴史を丹念な調査と重層的な視点から追究した労作。

◆四六変判・予価2300円

ヨアヒム・エレミアス著／南條俊二訳

## イエスの譬え話の再発見 (仮題)

金字塔的名著『イエスの譬え話』をより分かりやすく英語圏で紹介したいとの著者の願いから生まれた英語版。

◆四六判・予価3500円

● 12月に出版の本と雑誌

## ローマ帝国のたそがれと アウグスティヌス

磯部隆著



古代末期の神学的巨人の生涯を、帝国の衰亡史と重ねてその時代を鮮やかに描き出し、ペラギウスや弟子アリピウスの述懐を通してその思想を浮き彫りにした壮大な歴史小説。◆四六判・本体2200円

## 現代に生きる教会

森野善右衛門著

再掲 対話・共生・平和

現代に生きる教会のあり方を模索し続けてきた牧師・神学者の、教会の本質論から実践的な問題提起にわたる近年の論考を集成。

◆B6判・本体1500円



## 福音と世界

◆税込635円

1月号

特集 キリスト教と近代日本——「明治150年」を考える

寄稿者…山口陽一、森島豊、小椋山ルイ、勝呂奏、清水正之

／藤原佐和子、末井昭、グレイディみかこ、宇都宮健児、

高井ヘラー由紀、芦名定道、内田樹、月本昭男、辻学、佐藤優、望月麻生

●さる2017年は邦画が豊作の年でしたが、先日観た入江悠監督『ビジュラ』はその締めくくりとも言える作品でした。監督の地元である埼玉県深谷市を舞台に、シヨッピングモールの建設予定地をめぐる争う男たちが権力と暴力の泥沼へ落ち込んでいくというストーリーです。閉塞感の漂う地方都市の景色や、たびたびでてくる性差別や人種差別の描写もあいまって、作品はこの上なく陰鬱なムードを終始漂わせていました。ですが、そうして男たちが繰りひろげるホモソーシャルな争いも差別も、あるいはそれらからの逃げ場のなさも、地方だけではなくこの社会ぜんたいの縮図なのかもしれません。

「街に出て、ズボンの尻を汚してみなさい」という言葉がありますが、あらたな1年はそうしたスタンスをいかに身に染みこませるかという格闘の年にしたいと思います。(堀)

●そうは言いつつも、地方都市と東京がじつさいう違うのかは、いまの私にはイメージしづらいことでもありません。私は子ども時代の大半を四国・香川で過ごしましたが、もう10年近く香川には足を踏み入れていません。ですが、そのリアリティを欠いた人間が東京から出版物を送りだすだけでは、乗り越えられない壁がある気がします。フィールドワーカーの金言のひとつに

●昨年11月23日に村上伸先生が、27日に島多代さんが相次いで逝去されました。村上先生はバルト、ボンヘッファー、ゴルヴィツァーなどの多数の優れた翻訳によって日本の教会と神学に計り知れない貢献を果たされ、また教界きつてのドイツ通として『西ドイツ教会事情』を著したほか、『いのちを望む神』『荒野の旅に先立つ主』『あなたはどうか生きるか』などの著作を通して現代人への福音の伝達に努められました。島さんは至光社で絵本編集者として活躍された後、「優れた絵本は次世代の子どもたちに手渡せる最良の財産」との信念のもと、国際的な人脈を生かして絵本の紹介と普及に献身、IBBY（国際児童図書評議会）の会長も務められました。小社からはファージョンの『ちいさなもの』の『海と灯台の本』を出版してくださいます。お二方に心から感謝の思いを捧げます。(小林)

# 福音と世界

2018年  
2

A5判・80頁・定価635円・送料70円  
年間予約購読料(送料共)8460円

特集：笑うキリスト教

実践神学と「笑い」——越川弘英

イエスの笑いをとりもどそう！

——微笑みと粒の涙——滝澤武人

笑いの形——旧約聖書と笑い——飯郷友康

コメディ映画とキリスト教——服部弘郎

基地に笑いで立ち向かえ！——お笑い米軍基地・小波津正光さんに聞く

性的マイノリティをめぐる韓国教会の「異端」論争

レヴィナスと人間の苦悩——長尾有起

『映画評』市井のイエス、スクリーンに生まれ——吉田 咲

〔連載より〕

◆地のいと低きところにホサナ2——ブレイディみかこ

◆福音の地下水脈4——末井 昭

◆はじめての台湾キリスト教史11——高井ヘラー由紀

◆現代神学の冒険17——岩名定道

◆聖書とわたし23——向谷地宣明

◆新約釈義 第一テーマ書24——辻 学

◆レヴィナスの時間論35——内田 樹

◆ことばの履歴書46——佐藤 優